世界創世ゲーム

八七八　九々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界創世ゲーム

【Ｎコード】
Ｎ２４３４Ｙ

【作者名】
八七八　九々

【あらすじ】
神様になりませんか？
今話題のオンラインゲームの売り言葉だ。
プレイヤーは神となって、まだ言葉さえしらないＡＩ達を導いてゆくのだという。
発表前からクソゲーだ神ゲーだと言われたこの作品が、遂にリリース！　さあ、諸君らも神となって、人類を導き給え

プロローグ（前書き）

見切り発車　時々更新

八七八九々の小説執筆上、本作品は後々大幅に改訂される可能性があります。　申し訳ないですがご了承ください

プロローグ

今アナタの手によって世界は創造される……。

Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅへようこそ！　ゲネシスオンラインはアナタの手によって、世界を、人を創造し、導いてゆく世界初の国家主導
ＭＭＯＳＬＧです！

Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅって？

Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅは神によって天地創造された世界を、アナタが神の一柱となって人間を導いてゆく、従来のゲームを超えた新感覚次世代ＳＬＧです。
　従来の規制されたＡＩの枷を取り除いたキャラクター達は、導き手であるあなた達でさえ驚くような進化をみせることでしょう。

さあ、あなたも人間を導いて世界を創造してみませんか？

登録は下のボタンをクリック

「マキ、このゲームどう思う？」
照明の落とされた薄暗い部屋のなか、ぼんやりと青白の光りが部

屋を鈍く照らしている。
ＰＣの前には影、時よりフラフラと揺れるかと思えば、部屋の中にカチカチと音が響く。
ジジジジと思いだしたかのように唸る黒い箱は、今の時代のそれと比べると比較にならないほどに大きく、古めかしかった。

「何がだよ」
影に答えたのは、同じく影だった。
影の背後で答えた影は、今より数十年ほど前、突如として青少年の心を”萌”という新文化で掴んだ給仕（メイド）服を着ていた。萌えという言葉は当時から三十年が過ぎた今もまだ現役である。
「いや、面白いのかなって」
影はそう言った。その言葉には感情が一切伺えない。
「そんなの知るか……。わかったよ、調べればいいのか？」
うって変わって、答えるメイド服姿の影は存在な言葉ながらも、そう答えた。
「ああ、頼む」
影はそれだけを言うと、再び画面に視線を落とした。

「へえ、面白そうじゃないか」
「どうなされました？　お坊ちゃま」
豪華絢爛。この部屋を一言で表すならばこれに尽きるだろう。
畳二十畳はある部屋に、歩けば沈み込むような絨毯が敷かれ、中央壁よりには天蓋付きベッドがその存在を誇示している。
その反対側に置かれた凝った装飾の机と椅子。そこに腰掛けて目の

前に浮かぶ画面を操作するのは、部屋と同じく、それ以上に高貴さを持った少年だった。

「ああ、爺やか。いやね、前々から話題になっていたゲームが、遂に一般に開放されるらしくて」

「ほう、ゲームといいますと。あれですかな？　国が科学者と一緒に研究していたという。確か、人類の進化をもう一度仮想世界でやり直すとか」

背後に控えていた初老の男がそう言った。男の出で立ちは黒の燕尾服と、まさに執事であった。

「そう、発表された当時は何を馬鹿なって話だったけど。でもこれを見るとね」

そう言って少年は画面を指でなぞった。なぞった文字が大きく表示される。

「ＡＩの規制を取り除くですか。やれやれ、我々ＡＩとしては根底を損なわれるような事ですな。ですがこれなら確かにＡＩを人間と同様の進化をさせることができるやもしれません」

ロボット三原則

第一条　ロボットは人間に危害を加えてはならない。また、その危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない。

第二条　ロボットは人間にあたえられた命令に服従しなければならない。ただし、あたえられた命令が、第一条に反する場合は、この限りでない。

第三条　ロボットは、前掲第一条および第二条に反するおそれのないかぎり、自己をまもらなければならない。

これらを根幹とし、その他にも百八つの法則を載せたのが今のＡ

Ｉの行動原理となっている。
　その他にも危険地帯や介護など用途によって法則が変わったり、増えたりしてはいるものの、この三原則と百八つの法則は全てのＡＩに適応されている。
　また、三原則が陽電子頭脳の設計理論の根幹を成しているため、新たにＡＩを創り上げる事は多大な労力と期間を要する事になり事実上不可能に近いとさえ言われている。

「ＡＩはロボット三原則が無い限り機能しない。あり得ないはずなんだけどね」
「だから面白そうだと？」
「そう、確かにＡＩの枷ともいえるロボット三原則を撤去してしまえば、原始時代から現代、もしくはさらに未来にまでＡＩの独自文化で発展し、それを観察出来るかもしれない。だけど」
「我々ＡＩはロボット三原則が無いと動かないし、動かせない」
　うん　と少年は頷いた。

「面白そうだと思わないかい？　それに、どうやら僕達人類と同じ歴史を歩ませるつもりは無いようだ」
「と、言いますと？」
　少年は答えるかわりに画面に触れて、スクロールさせる。何度かの操作の後画面に表示された文字を爺と呼ばれた執事に見せた。

”剣と魔法の世界で、神様のお導きをお待ち申し上げます”

　少年は笑みを見せる。
「魔法なんて、ドキドキするだろ！？」
　滅多に見ることのない少年の純粋な笑みに、爺も笑みを浮かべた。
「坊ちゃまの御心のままに。私は情報を集めることと致しましょう」

ゲネシスオンライン　グランドオープンまで　あと一ヶ月

プロローグ（後書き）

ロボット三原則　設計理論の根源等　アイザック・アシモフ　引用

創世記　０（前書き）

未だ物語は始まらず

創世記　0

Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅはあっという間に世間の話題の中心となった。
人工知能を持ったアンドロイドが一般的になり、人間の仕事は徐々に無くなっていった事によって空いた時間。つまり人類は娯楽を要していた。
そんな折に発表されたこのゲームは、プレイに底がない事、今もってゲーム自体に謎が多いこと、そして神となってＡＩを導くと言う売り文句にあっという間に世間の注目の的となったのだった。
世間一般的に神ゲーだとも、クソゲーだとも言われるようになったこのゲームは、色々な意味を持ってして、世間に注目されることとなっていた。

もしかすると、その中には己等による地球環境破壊とそれによるシェルター生活を余儀なくされた今の生活を、せめてゲームの中では回避したいという想いが少なからずあったのかもしれない。
人が一歩も出ることを許されないシェルターの外の世界。その環境回復の仕事も、今ではロボットが行なっている。

「マキ、確か情報ではサーバーは確かジェノア社のメインサーバーを使うと言っていたな。どうやら予想していた以上にプレイヤーが多くなりそうだが、大丈夫なのか？」

仄暗い暗闇の中、影が己のガイノイドに問いた。
「んー大丈夫だろ。実質このシェルターを管理している連中だ。お飾りの政府と違って、やつらは抜け目がないからな。予想の範疇だろうよ。それに、今の世界人口全員が同時にアクセスしたって、問題ないだろうさ」

先の大戦と、戦争による地球汚染によって、人類の数は激減した。今シェルターに避難している約四千万の人間が世界の人口なのか、他の地にまだ生き残りがいるのか。それすら分かっていない。その為、このシェルターに住む人々は、世界人口を四千万人とした。また、ＡＩを持つロボット　アンドロイドが創られた主な理由として、地球環境の回復と、生存者の確認が第一級優先事項とされている。

「何故か今週に入って、ゲームの情報が公の場にやたらと目にするようになったのだが、ジェノア社が操作している可能性は？」
発見した時はまだ殆ど知られていなかったゲネシスオンラインだったが、ここ一週間ほどで突如としてインターネット上の至る所で耳にするようになった。
自然と広まったと考えられなくもないが、それよりも誰かが意図的に情報を流していると考えたほうが自然だ。
「無い……とはいえない。寧ろ可能性としては高いだろうな。だが違うと思う」
ほう、と己のＡＩのぱっとしない回答に、影は多少の表情を見せた。
「その心は？」

「私の勘だ」
ＡＩはそう答えた。

「え、なにそれ？」
萩村修一は友人の問を疑問で返した。
「お前知らねえの！？　ゲネシスオンラインったら今ネットで話題のオンラインゲームじゃん」

中、高等学校の授業が実質ほぼ自宅学習と通信教育になった現代において、高等学校一回生である萩村修一がこうして学校で友人と会うのはおおよそ一ヶ月ぶりの事になる。
勿論学校以外で会うこともあるのだが、教室の中で会うのは月に一度の出席日でしかない。現代においての学業も、殆どがアンドロイド任せなのが現状だった。

「いや、全く」
修一は普段家にいる時もあまりネットを多用しない。家が古書庫を営む故か、電子書籍よりも紙媒体を好む修一は、同じく学業以外ではＰＣを殆ど使用しない、電子文化の進む現代において、化石といっていいレベルの人間だった。
修一の言葉に友人である中野湊は嘆息した。

「おまえ……もう少し情報に気にしたらどうだ？　それだと話しについていけないだろ。色々と」

「いや、別に特に困らないし。新聞とってるから」
「新聞って言ったって、源田の爺さんがほぼ趣味で作ってるようなもんじゃねえか！　それに内容だって近所の野良猫と犬が喧嘩しただとか、嫁さんが夢枕に立っただとか、どうでも良いような事ばっかだし」

源田の爺さんとは、湊の住むマンションの隣に一軒家で住む変わった爺さんの事だ。家の一階部分は印刷所となっていて、そこで毎日新聞を作っている。もっぱら購読者は萩村家しかないのだが。
ちなみに、現代の新聞に当たるものは、毎日携帯端末に自動配信される。紙媒体はとうの昔に廃れている。

「いやいや、天気予報は当たるんだよ？」
「そらシェルターの中じゃ天気は管理されてるからな。今日が金曜日だから、明日の朝には来週一週間の分刻みで詳細な天気が発表されてるだろうさ！」

あ、そうか。　と今合点がいったかのような態度に、湊は再びため息をついた。

「まあいい、それでさっきの話だが、最近話題になっているゲームがあるんだ。それがゲネシスオンラインなんだが。まあこれを見ろよ」

そう言って湊はポケットから携帯端末を取り出し操作すると、空中に映像画面が浮かび上がった。湊はそのまま画面を指でなぞるように操作していくと、暫くして修一に見えるようディスプレイを動かした。

「ほれ、これがそのゲームの公式サイトだ」

湊が見せた画面には、大きくＧｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅの文字に、神々しさを描こうとして歪さを増した神のイラスト、どことなく陳腐さとバランスの悪さを感じるＨＰだった。
「これ？」
「これ」
修一の問に同じ言葉で返す湊。　修一にとってみれば、これの何処に話題性が有るのかが分からなかった。それを見て取ったのか湊が言葉を続けた。

「このゲームが話題を呼んだ理由ってのが、ほらここ」そう言って指で画面をスライドさせていく。
「ほら、これ」
湊の指差す先にあったのは　国営の文字。
「国営？　まあ確かに国営のゲームってのは珍しいよね。注目を集めるのも分かるかも」
「いや、そこじゃねえよ。その隣」
まだ何かあるのかと首を捻りながらも修一は続けて画面に視線を向ける。
「あー、なるほど。ジェノ研が噛んでるのか」

ジェノア社と言えば、実質このシェルターを管理、支配している企業である。とい言うよりも、シェルターの中にある企業全てがジェノア社の子会社や関連会社なのだ。　先の大戦後の混乱期、日本国政府が機能しなくなった時、成り代わって治政を行ったのが企業と地方自治であった。
ジェノア社はその混乱期中、地方に土地を買い、自社の周りに子会社を集めて一つの企業都市とした。それが今のシェルターの前身である。
その後環境悪化の為に避難してきた人々を受け入れ、巨大都市国家となったジェノア社は、環境汚染と共にシェルターとして機能を始

め、外界と完全に関係を断ったのだった。

外界からの汚染を防ぐためにシールドを開発し、都市全てをシェルターとしたのも、環境回復の為にＡＩを創り上げたのもジェノアのとんでも科学者達だった。

正式名称ジェノア科学研究所、略してジェノ研。そのとんでも科学を次々と開発、発表してきた連中が新たに打ち出したゲーム。

その為人々は期待したのだ。

”ジェノ研の手がけるゲームが普通のはずがない！”

ようやく合点がいった修一だった。

その後の湊の話を要約するとこうだ。

”一緒にゲネオンやろうぜ！”

要するに湊は修一と一緒にゲームをしたかったようだ。ちなみにゲネオンとはゲネシスオンラインの略称である。

湊の要求に一言了承の言葉を交わすと、友人は満足したようで自分の席に帰っていった。丁度担任が教室に入ってきたのだ。

担任のゴリラ、もとい、呉織（ごおり）先生の確認事項、その後の一人ひとりの面談を受け、修一は帰宅の途についた。

創世記　０（後書き）

八七八九々の小説執筆上、本作品は後々大幅に改訂される可能性があります。　申し訳ないですがご了承ください

創世記　1（前書き）

ゲームスタート？

創世記　1

光りあれ

こうして、光があった。

とはいかないものの、波乱万丈のゲーム開始から今で十分ほど。修一がゲームの”中”に入った時には既に天地創造は完了していた。

既に第六の日まで、運営という名の世界創造神によって世界は創られていたようだ。

修一達プレイヤーはこれから神の一柱として、プレイヤー自身を神と信仰する人間たちを創らなければならない。

世界滅亡まで、プレイヤーが創造した人間の一族を生き長らえさせること。ゲームに入る前、少女から受けたこのゲームの説明は、たったこれだけだった。

修一の家に荷物が届いたのは、湊にゲネシスオンラインを薦められてから二日後の事だった。

荷物が来てるわよー。と母親に呼ばれたものの、心当たりの無かった修一は首を傾げながらも荷物を受け取った。差し出し先はジェノア科学研究所。ピンときた修一はおもむろに携帯端末を取り出した。

「コール、中野湊」

携帯端末が自動的にコールを開始する。

「おう、どうした修一」
数コールの後、端末から間延びした声が聞こえた。
「さっきジェノ研から荷物が送られてきたんだけど」
「おお、来たのか。中は開けたか？」
「いや、まだ」
「何故開けない！　早く開けろ、今直ぐ開けろ、そら！　今だ！」
「……わかったよ、だからちょっと待て」
あまり急かすなと一言、修一は受け取った荷物を開けに掛かった。

配達用の箱というものは早々変わらないものなのか、今も昔も箱の素材はダンボールだった。多少雨に強くなったり、強度が上がったりはしているものの、人口の最も多かった時期と比べても、そう変わりはない。
そう言えば、昔はガムテープなるもので一々止めなければならなかったと聞いたことがある。
今のダンボールは当時と違って、強度の高い蓋が付いているので開け閉めも楽でいい。一度閉めてしまえば正しい手順でないと開けにくい仕様なのだ。勿論素材がダンボールなため、強引に引きちぎれば開けることは出来るのだが。
父に聞いたことをぼんやりと考えながら修一は封を剥がし、開けていく。と、中から白い緩衝材に包まれた何やらゴツイ物体が現れた。
箱の中から取り出す。
「なんだこれ？」
出てきたものをみて、修一は呟いた。
「お、開けたか。きっとお前の事だからＶＨＭＤ（バーチャルヘッドマウントディスプレイ）なんか持ってないと思ってな。注文しておいた」
箱の中に入っていたのは、一見サンバイザーにも見えなくもない物体だった。だがサンバイザーと違って分厚く、脇からコードが生

えている。　どうやら頭に被って使うものらしい。被れば厚い部分は目の位置に来る。
「注文って、お金――」
「金は要らないぞ。どうやら今回は国……とうかジェノ研の研究目的が強いらしくてな。ＶＨＭＤは研究参加者に無償で配っているらしい。それが今お前の持っているやつだ。ちなみにゲームも基本無料だ」
「それはなんともまあ、太っ腹なことで」
「だな、発売日に並んで買った俺に謝れ！」
　そう言えば湊は何時だったか深夜に並んでゲームを買ったと言っていたことがある。きっとその時にこのＶＨＭＤを買ったのだろう。
「しかも俺の買った奴より反応速度も接続速度も上がっているときやがる。読み込みだって確か随分と早くなっているはずだし、軽量化もされているとか。羨ましすぎるぜ。そもそもだなＶＨＭＤと同じ機能を持つゲーム機自体は二十年も前にはあったんだ。当時はエッグカプセルといって卵型の大きなカプセル状だったらしい、その中に入って遊んだんだ。当時人気だったのがロボットを操って戦うゲームで、大きな大会も開催されたとか。でだなあ――」
　湊がゲームについて語り出せば一日かかっても終わらない。
「でもさ、このＶＨＭＤって無料なんだろ？　なら今からもう一つ頼めばいいじゃん」
「……あ」

　湊曰く、ゲーム内では自身がアバターとなって、実際にその場所にいるように感じるらしい。まだゲネシスオンラインがどのようなゲームか分かっていないが、少なくとも今までリリースされてきたゲームではそうらしい。

取り敢えずは中で会う為にと、湊が名付けるであろうアバターの名前を聞いて、会話を終了した。当日はこちらから湊を呼び出す事になる。

ゲームが始まる正午、修一はＶＨＭＤを被ると、こめかみ部に造られたコネクトボタンを起動させた。

電撃が身体を突き抜ける。目の前が虹色の閃光に包まれ、暗転。身体が回転し、加速する。あっという間に修一の身体は引き伸ばされ、細い線となって、闇の奥底へと落ちてゆく。

洗濯機の中にいると、きっとこんな感覚だろう。修一の初めてのＤＩＶＥの感想だった。吐き気を催しうずくまる。そうして気がついた、うずくまった修一の両手の感触は、何時もの自分の部屋の柔らかなカーペットとは違い、冷たく硬い。修一は石畳の上にうずくまっていた。

「ここは？」

立ち上がって辺りを見渡す。辺りには幾つもの石柱が建っていた。形やデザインからして何処と無くパルテノン神殿を思い浮かばせる造形をしている。だが相当古いものなのか屋根は既にほぼ残っておらず、屋根の変わりに雲ひとつ無い蒼穹が広がっている。

神殿の外はと視線を伸ばしてみれば、その先に見えるのは雲雲雲、白い雲海が広がっている。どうやら相当高い位置に自分はいるようだと修一は思った。

「ようこそゲネシスオンラインへ」

辺りを伺っていた修一に突如として声がかけられた。驚いて振り返った。

そこには、いつの間に現れたのか背中に白い羽を生やし、薄く金色に光る輪っかを頭に浮かべた、だが何故か髪の毛が黒で、容姿も日本人といったアンバランスな天使？　が笑みを浮かべてそこに居た。

「いや、そこは統一しようよ」

思わず突っ込む。第一声が予想外の突っ込みだったからか、天使は愕然とすると、今度はオロオロと狼狽しだした。

「え、だ、だってこれ可愛くないですか！？　私この羽根と輪っか付けたくて今日を楽しみにしてたんですよ！」

「いや、可愛いとは思うけど……」

そう、どちらも可愛いとは思うのだ。天使の羽や輪っかだってアングロサクソン系の少女が付ければその子の可愛らしさをもっと引き出す事だろうし、黒髪の少女だって現実では中々お目にかかれないような美少女だ。着物を着せればさぞかしその黒髪が映える事だろう。

だがあくまで日本人顔である彼女に天使の羽と輪っかは似合っているとは言えない。

「何かアンバランス」

修一の率直な感想に、少女は肩を落とした。

「そんなぁ。折角可愛い格好出来ると思っていたのに……。グス……」

肩が震え、声がか細くなって修一は己が何かマズイことを言ったのだと慌てた。

「あ、え、いや、でもほら、君可愛いし、きっと着物何かを着たらすっごく似合うと思うよ。うん！」

「着物？……グス。でも、このセットにあわないと、思う、の。ほら、設定だって神様だし」

「ほ、ほら日本にだって神様は一杯いるし、八百万の神とか！」

「きもの、着てる、かみさまがいても、グス　おかしく、ない？」

「うん、ナイナイ。大丈夫だって！」

寧ろ座敷わらしみたいで可愛いと修一は思った。

「わかった。着替える」

「それがいいよ、着替え……。着替え！？」

着替えと聞いて修一は一瞬思考を停止させた。少女が衣服に手を当てたのを確認すると、慌てて身を翻そうとして、動きが止まった。

光の奔流。少女の体から光が溢れ、空間に光の粒子として流れだす。神々しくも何処か優しいその光に、修一は一瞬にして魅入られ

た。

「えっち」

気がつくと少女の衣服は真紅の着物へと姿を変えていた。恥ずかしそうに頬を染めて少女はそう言った。

「え、あ、いや、違う」

慌てる修一をみて少女は口元に手を当てて笑った。

「分かってる。着替えなんて一瞬だし、そもそもエフェクトで素肌なんて見えないしね！」

「う、うん」

泣かされた仕返し！　そう言って笑う少女の姿に、修一は頬を紅くした。

「さて、そろそろ本題に戻ります！」

「本題？」

「あら？　私がどうしてここにいると思っているの？　いささか脱線しちゃったものの、時間が推してるので今からこのゲームの説明を行います！」

なるほど、送られてきた箱の中にゲームの説明書が無いのはこれが理由かと合点がいった。

「このゲーム　Ｇｅｎｅｓｉｓ　Ｏｎｌｉｎｅでは、あなた方プレイヤーに神となり人間を導いてもらいます。人間たちはあなた達を神として信仰し、敬うことでしょう。あなたの命令ならどんなことであろうとも言うことを聞くはずです。なんたって自分たち一族を創ったのがあなたなのですから。ですが一つ覚えておいてください。これはゲームです。ですがゲームの中のキャラクター達には各々思考し、意思があります。あなたは、これから生まれるであろう彼ら

人間の命全てを握っているのだと考えてください。考えることができない場合、また、あなた自身の手でキャラクター達を悪意をもって故意に死に追いやった場合、ゲームの参加資格が無いとして、ゲームを強制終了させて頂きます」

それはあまりにも……。

「やり過ぎだと思いますか？　ですが、これは私がこのゲームを許可する上で運営に厳守させた内容でもあります。キャラクター達にも命があるのです。それを無下に扱うような人に、このゲームはして欲しくない」

そう言った少女は何処か悲しげで、何か途方も無い葛藤があるように、修一には思えた。

「ですが、泣いてしまった私を気遣う事のできるあなたなら、きっとそんな心配をする必要はないでしょう！　私はあなたを信用することにします」

たったそんな事で信用されても……。そう思うと共に、美少女に信用されるのも悪く無いと、思わず頬が熱くなった。

「さて、ここからは詳細なルール説明ですが……。あれ、ごめんね！　そろそろ時間のようです。まあ実際に遊びながら理解していくって事でいいですよね！　それじゃ！」

「え、ちょ、ちょっとまってよ！　そもそも僕こういたヴァーチャルなゲーム自体したことが無いんだけど！？」

「大丈夫！　直ぐに慣れますよ。そうそう、一つだけ、このゲームのクリア条件の一つは、”世界滅亡まで、プレイヤーが創造した人間一族を生き長らえさせること”それでは行ってらっしゃ～い」

修一の足元に突如として大穴が空いた。
「ま、これってまさか！」
修一の脳裏にあまりにも古典的すぎる移動方法が浮かんだ。そしてそれに置ける扱いの酷さも。
「それでは～」
「やっぱりいいいいいいいいい」
最大級の微笑みを持って手を振る少女を遙か上空に残し、修一は絶叫と共に雲の海を超えて地上へ落下した。

創世記　1（後書き）

八七八九々の小説執筆上、本作品は後々大幅に改訂される可能性があります。　申し訳ないですがご了承ください

創世記　2（前書き）

遅くなりました　面目ない

創世記　2

風が頬をくすぐる。辺りを見渡せば高低のない広い草原がどこまでも延々と続き、遥か遠くには巨大な山脈が脈々と連なり、天をつくばかりの山頂は白く雪が積もっている。背後には広大な森が広がっており、時よりチッチッチッチッと鳥のなく声が聞こえていた。

修一は今、生まればかりの大地に立っていた。

目の前の光景に目を見張る。

「――すげえ、これがヴァーチャルゲーム、バーチャルワールド！」

眼の前に広がる景色は現実そのもの、いや、現実でも見たことのないような風景だった。

修一は、自分の胸の内から何か熱いものが込み上げてくるのを感じた。こみ上げて、溢れて、爆発した。

「スゲエエエエ！！！」

この景色こそ、修一が本の中や映像でしかしらない、シェルターの外の世界だった。

人工の構造物など何もない景色、色のない人工の景色とは違い、ここでは全てが”自然”だった。

「……のどかだ」思わずそう呟いた。

「ここがゲームの中……」
眼の前に広がる景色に思わず呟いた。
目の前に広がるのは現実とはなんら変色のない景色、いや既に失われた事を考えると、これは正しくゲームの中だと言えた。
「凄いもんだな。初めてＶＲと言う物のを体験したが、まさかこれほどまでに現実と酷似しているとは」
ふと己の耳元辺りでくすぐるように声があった。
驚いて横に振り向くと、そこにはメイド服を着た己のＡＩ兼メイドが居た。
「マキ、ＡＩのお前がここで何をしている。そしてなんだその姿は」
「なんだよ、ルイカは人間じゃないとゲームをしちゃいけないとでも言うのか？」
「そんな事は無いが。――人間をサポートするために創られたガイノイドがそれでいい……のか？」
一人手に自問自答しだしたルイにマキはため息をつくと話を続けた。
「このゲームは説明にもあったと思うが現実とは時間の進み方が違う。だからこのゲームではアンドロイドを特別にゲームにサポートとして参加させることを許可している。限度は一人につき三台まで、アンドロイドはゲーム内では天使としてプレイヤー、――俺の場合はルイだな。をサポートするって訳だ」

なるほど、ルイカはマキの説明に納得すると頷いた。
人類の進化と銘打っているが、実際に何千年もかけてゲームを遊ぶ訳ではない。現実と同じように進むのなら、人間を創った所で文明が発達するまで数百年と掛かってしまう。それではこのゲームの意味が無い。

「なるほど、マキがこのゲームにいる理由は分かった。だが、それにしてもその格好はなんだ？」

メイド服は何時もと変わらない、だがしかし、何時もとは違い身体の大きさは手のひらほどに小さくなり、どこかマスコットキャラクター的な容姿にマキはデフォルメされていた。

「うん、か、可愛いじゃないか」
吹き出しそうになるのを堪えながら、なんとかルイカはそう言葉に出した。

「うるせえ！　わらってんじゃねえ！」
暴力的な発言も、何時もと違ってその容姿では意地っ張りな子供程度に微笑ましい。

「いい子だからそんなに怒らないで、ね？」
「子供扱いするな！　てか笑うな！」
二人の喧騒はその後数分間続いた。

「はあ、で、俺がここに居る理由は理解したと思うが、そろそろ人間を創造したほうがいいんじゃないか？　何時までたっても始まら

ない」

二人がゲームの中に入って十数分。そろそろ何らかのアクションをとってもいい頃だ。

「それもそうだ」

ルイカは頷くと、右手を宙に翳した。

「クリエイション」

呟いたと同時に視界に幾つものパネルがルイカを囲むように広がる。

「ほう、人間とは言っても色々あるのか」

パネルの画面に浮かびあがったのは多種多様な種族、民族の生き物たち。明らかに獣と足して割ったかのような獣人や、エルフ、ゴブリンといった魔物に近いものまでが人間という分類に含まれていた。

「選べるのは一種族だけだぞ、選んだ一族が滅びればルイカはゲームオーバーだ。よく種族ごとの特徴を見るんだな」

マキの言葉に頷くルイカ。

「それにしても、さすがに種族の進化まではゲームの内容に含めなかったようだな」

そうでなければこのような多種多様な種族はあり得ない。人間が猿から進化したというように、これだけの種族も元の生き物がいたはずなのだ。進化も含めたゲームであったのならば、その地点から

ゲームを始めなければならない。
だからルイカは進化まではゲームに含めないそう考えた。だがマキの考えは違ったようだ。

「どうだろうね、このゲームでは進化論ではなく、神が人間を創りだしたという事になってるんじゃない？　神が土からアダムをつくり、アダムのあばら骨からエバを創りだしたように」

なるほど確かに。
ルイカはマキの言葉に納得するように頷いた。

マキのレクチャーもあって、ルイカは大まかなこのゲームの遊び方を理解した。だが、マキ曰く未だこのゲームには明らかになっていないルールが幾つか有ると言う事だ。それについては追々分かってくるだろうと今は置いておくこととした。

「……これだな」

パネルより一つの種族を選択する。

エルフ

身体能力、知力、魔力、寿命とそれぞれが通常の人間と比べて圧倒的に優れている分、繁殖能力が遺伝レベルで低いのが弱点と言える。世界滅亡まで人間を生き長らえさせるという内容では多少不利であるかもしれない種族だった。

「いいのか？　いささか繁殖能力に不安があるけど。序盤はいいが、

後半から苦労しそうだ」

マキの問いかけにルイカはそれでいいと頷いた。

「このゲーム、どうやら序盤は大波乱になりそうだ。人間の歴史は戦争の歴史であると言って良い。あちこちで人間が生まれ、増え、いずれはどこかでぶつかる。そうなった時生き残るのは遺伝レベルで強いモノだけだ。エルフなら早いうちに資源地域を制圧し、敵が脅威となる前に周囲を一掃してしまえば怖いものはない。後はひっそりと数を増やしながら忍ばせれば暫くはもつだろうさ。それに対して一番選んではいけないのが、これだ」

そう言ってルイカが指さしたのは、獣人、そしてヒューマンだった。

「獣人も細かく種族によって分類される。特徴としては肉体が他の種族に比べて高い事があるが、あきらかにこいつ、ケット・シーは外れだ」

ゲネシスオンラインでのケット・シーは、猫というよりも、どちらかと言うと人間に耳と尻尾を生やしたといった方がいい容姿をしている。愛らしい姿で男性女性に関係なくプレイヤー内では一番人気間違いないだろう。次点で精霊族といったとである。

「ネコミミで可愛いがそれだけ、魔法が使えるわけでもなく、肉体強化も俊敏が少し高いだけ、そのくせ男が生まれにくいため、繁殖力はヒューマンよりもさらに低いときた。これではゲームの序盤で乱獲され奴隷になるのが落ちだな。そしてヒューマン。人間と言われて最もはじめに思い浮かべるのがこのヒューマンだが、繁殖力以外に見る所がない。オールラウンダーだが、その分弱くもある。序盤さえ生き残ればどうにかなるだろうが、その序盤に殲滅される可能性が高いのがこのニ種族だ」

なるほど、マキは己の主人言葉に納得した。ケットシー何かは可愛らしい分人気が集まりそうだが、選んだプレイヤーは直ぐに泣きを見る事になるだろう。

ゲネシスオンライン、単なるジェノ研による研究の一環なだけのゲームかとも思ったが、なかなかどうして何か裏の有りそうだ。

取り敢えず分かることは、ゲーム序盤、このゲームは大いに荒れまくるだろうと言う事だけだった。

創世記　2（後書き）

中々人間をつくれない　次回もまだかかります
人間はその次になるかな？
影で名前の無かったキャラにルイカという名前がつきました

創世記　3（前書き）

本作品ではロボットは幾つかに分けて使っています
ロボット＞機械で造られたもの
ヒューマノイド・ヒューマノイドロボット＞機械でありながら、人間の形をしているもの
ガイノイド＞ヒューマノイドの中でも女性型のもの
ＡＩ＞人工知能を持つもの

本作品のロボット達は工場、環境活動などで使うロボット以外はほぼ全てＡＩを搭載したヒューマノイドロボットです。
マキなどは　ヒューマノイドの中の、ガイノイドと考えてください。

創世記　3

「は！」
気がつくと修一は草原のに寝転がって、惰眠を貪っていた。まさかゲームの中がこんなにもリアルで、現実とみまかう程のものとは思ってもみなかったのだ。
シェルターはもとが避難所としての意味合いが強いため、企業地区と住宅区以外の娯楽施設が極端に少ない。今修一の間の前に広がるような緑ある風景など、今の現実世界では何処を探しても既に失われたものだった。

「で、どうすればいいんだ？」
ゲームが始まったのはいいものの、修一は説明も何も無くゲームの中へ落とされた。ゲームの内容と、僅かばかりの説明からして、人間を創らないといけないというのはわかる。が、どうやって創ればいいのかが分からなかった。
修一が一人悩んでいると、突如として甲高いコール音が辺りに響いた。
飛び上がって驚いた修一の前に、”ＣＡＬＬ”の文字が宙に浮いて点滅していた。　恐る恐るそれに振れる。
「こっっっらあああああ！！！　今何処で何してやがる！　ゲームに入ったら直ぐに呼べって言ったよなあ！」
突然の怒鳴り声に修一は飛び上がった。怒鳴り散らして連絡してきたのは湊だった。

「びっくりしたー。そんなに怒鳴らなくたって」
「俺が一体何分待ったと思ってるんだ。修一の事だからあたりの景色に驚いて見入ってる事もあり得るなと十分ほど待ってみたが、全く連絡がない。一体何してたんだ？　しょうがないからこっちから連絡してみたわけだ。でも本名でオンラインゲームする奴って居るか？　普通」
「ははははっ　……寝てた」
ピキッ！　何かが切れる音が聞こえた気がした。
「……寝てただと！？　ははははっ待ってろ今そっちに行く」
通話が切れたと同時に、修一の周りに突如として光が溢れ中から湊が現れた。

「はぁ、まあ分からないでもないけどな。初めてＶＲやった奴の反応なんて大概一緒だ。だけどさすがに入って早々寝たなんてヤツは聞いたことがない」
「本当です、湊様のご学友は大変に面白い方でございますね」
あまりの景色に感動して、草原で横になったらいつの間にやら寝ていた。そう説明する修一に湊はため息を付いた。
いくら待っても修一からの連絡がないことに痺れを切らした湊は、取り敢えず”ＣＡＬＬ”で手当たり次第に思いつく名前を入力して探すつもりだったそうだ。だがまさか無いだろうと思ったシュウイチでヒット、ＣＡＬＬの後にテレポートで移動してきたとの事だった。
湊の横でフワフワ浮いて居るのが湊のガイノイド。名前をアキと言うらしい。ガイノイド全般に言えることだが、本来のその姿は人

目で作りものだと思わせるほどに完成され美しい。完成されすぎると逆に人間には見えなくなるのだ。
だが今の姿は美人と言うより可愛らしい。愛らしい姿に思わず修一はほっこりとした。

「まあいいや。それで、修一はどの種族にするんだ？　俺としては竜人とか、エルフ辺りが強そうで良いと思うぞ。まあ俺はケット・シーちゃん一択だがな！　見ろよこの愛らしい瞳！　フサリとした耳にスラリと伸びる尻尾！　あーもふもふしてええええ。触りてえー！」

いささか危険な目をしてパネルの画面に抱き付いている湊に修一は頬を引きつらせた。

「えっと、ごめん。どうやって選ぶの？」
その言葉に湊は固まった。

「湊様、修一様はふだんからゲームなどあまりされない方と伺っております。ＶＲについてはこの度が初めてだと。分からないのも無理はありません」

説明差し上げる必要があります。そう言う己のガイノイドに説明させようかと考えるものの、そもそもこのゲームを誘ったのが己自身だと言う事に気が付いた湊は、何も分からず首をかしげている修一を見て
「まあ、仕方ないか」そうつぶやくのだった。

「いいか、基本ＶＲは音声認識機能が付いている。指を動かしてＵＩを操作しても良いが、表示させるだけなら音声の方が早い。　画面を開けるつもりで”メニュー”言ってみろ」

湊の指示通り修一も続く。
「”メニュー”」
すると目の前に突如として半透明なパネルが浮かび上がった。次々とパネルに様々な情報が表示される。
「よし、上手くいったな。言葉で起動させる時はメニューを出すという意思が必要になる。でないとRPG系のゲームでは、店で食事を取ろうとする度にUIを起動させてしまう。意思をVRHMDが感知し、ゲームに反映させるシステムなんだろう」
ほー　っと当たり障りのない返事を返す。修一にとってすればなぜゲームの中で食事を取る必要があるのかがまず分からなかった。
「で、つぎはこれ”クリエイション”」
パネルの映し出す映像が変わる。
映像に写ったのは各種族の外見や特徴など分かりやすくパラメーター化したものだった。
アキ曰くこれは初期値だそうで、今後文明を発達させていけば自然と環境にあったように変化していくだろうとの事だった。
「その中から一種族選ぶらしい。俺はケット・シーにしたけど、修一はどうする？」
少し逡巡する。そののち、ひとつの種族を指さして答えた。
「僕はこれにする」
何にしたのかと覗き込んだ湊は一瞬眉を寄せると、修一らしいか、

と頷いた。

「それじゃ早速、人類、創造しちゃいますか？」

これから人間を創造するには軽い言葉。指先一つで命が生まれ、消えてゆく。だがこれは所詮ゲームなのだ。

彼らはボタンをタッチした。そして、神となった。

創世記　3（後書き）

ちょっと突っ走った感が有ります。

次回　遂にＡＩの人類初登場？

原始期（前書き）

やっと人間の登場

原始期

彼が目を開けた時、目の前の存在に思わず身を伏せた。
彼には目の前の存在が何か己を超越した存在であり、そして己を創りたらしめた存在であるのだと不思議と理解できた。
気がつくと彼は両膝を地に付き、深く頭を垂れていた。この存在は唯一であり絶対でもある。決して反さず、絶対に準じ無くてはならない。逆らうな。彼の中の何かがそう警告する。

「え、ちょ、ええ！？」

彼は神が何を言っているのか理解出来ない。生まれたばかりで言語というものを知らず、また理解も出来ない。ただただ神の怒りを買うまいと身を深く沈めるのだった。

クリエイション　そう修一が唱えると、地面がモコモコと盛り上がり、人間の形へと変容し始めた。まるで泥人形のようだと修一が驚いて目を見張っているほんの一瞬の内に、人形に髪が生え、皮膚が浮かび上がり、ついには完全なる人間、種族ヒューマンがその場にうずくまって存在していた。修一が選択したのはヒューマンだった。
予想外の人類創世に戸惑っていると、あろうことか産み出した人間は修一を見た瞬間に身を伏せ頭を垂れたのだ。これに焦ったのは修一だった。どうにか頭を上げさそうとするも、全く言葉が通じている様子がない。さっきから驚かされたり、焦らされたり、困らさ

れたりといい加減ため息ををついた。

「困ったなあ、人を創ったのはいいけどこの調子じゃ」

修一は未だ頭を垂れる人間を見やるが、立ち上がる気配すらない。微動だにせず修一に向かって頭を下げ続けいた。いや、よく見ると微かに震えている気がした。

「うーん、ああ！　あれだ。言葉が分からないんじゃないか？　教えてやらないと。えーとたしか、ほら！」

同じく隣でケット・シーをクリエイトしていた湊も同じような状態だった。湊の側には頭から耳、おしりから尻尾を生やした青年が片膝を付けて頭を垂れていた。

湊はおもむろにインターフェイスを操作し始めると、何かを見付けたようだった。

「なになに、神として一番始めに人間に教える事の出来る知識は、言語、武器、農作の三つである。与えられた人間達は、その知識の基礎を知り、自在に操り発展させていくだろう。選ばなかった項目については、自然と発見するか、他の文明との交流で得られる事であろう。攻略の手引き原始期編」

「つまり？」

「つまりは言語さえ教えてしまえば、こいつらと会話出来るんじゃないかと」

言語を教える。つまりはそれ以外の事柄は教えないと言う事だ。

「でもそれだとこいつ、食べ物とか手に入れられるかな？　狩りするにも武器とか、農業も必要になってくるだろうし」
「さすがに大丈夫だと……思いたい」
二人の間に沈黙か広がる。さすがにゲーム開始早々に餓死でゲームオーバーにはなりたくない。

「ん？じゃあさ、俺たち二人で別々の知識を与えて、それをお互いに教えあわせたらどうだ？　そうすれば一度に二つの文化を手に入れられる」
「おお！　お前天才！」
「……さすがにゲーム早々餓死で終わるという事は無いと思いますが」アキの呟きはあれよこれよと話を進める二人の喧騒の中に埋もれていった。

二人の目の前にはそれぞれ種族ごとに十人程の人間が居た。あの後二人して創造出来る人間の限界数である十人まで人間の数を増やしたのだ。男五人女五人とつがいが出来るようにした。

「それじゃ、修一が言語で、俺が武器な」
二人で話し合った結果だ。オールマイティであるヒューマンよりも、多少なりとも肉体強化されているケット・シーの方が武器を上手いこと扱えるだろうという、湊の考えが採用された。

「それじゃいくぞ、『グラント！』」
未だ頭を伏せたままの人間たちに向かって、片手を向け、二人同時にスペルを発動する。
光が手から溢れ、彼らの体に流れ込む。光が消えたのを確認すると、修一は一番始めに創った男に声をかけた。

「あーえっと、聞こえてる？　理解できる？」

修一の言葉に男は身を震わせたのち、ポツリと呟いた。

「は、い　き　えてぃぁす　かみ、よ」

「ギコチないなあ、初めて話したからか？」

「もうし　け　ません。いまだ、こ　ばんに　なれまん」

「まあそれは仕方がない。言葉が理解出来るならいいさ。それより、君には僕が創った人間達の代表となって、彼らを導いて欲しい。そして、彼ら。彼らケット・シーに今僕が君たちに教えた言語を教えてやってくれないか？　変わりに彼らは君たちに戦い方を教えてくれるだろう」

男は頷いた。

「われらを　つく　し、おかたのめいな　らば。しかと」

「うーん。そこまでかしこまらなくてもいいんだけどなぁ。まあいいか。それじゃ、僕から君への贈り物だ。君に名前を上げよう。そうだな。君がすべての始まりだ。君の名前はアルファ。君はアルファだ」

その後何とか身振り手振りで一緒に生活するよう指示していた湊だったが、ようやくケット・シー一族が全てを理解した頃には既に身も心もクタクタになっていた。「もう嫌、俺こいつらと会話出来るようになるまでゲームやらねえ」ゲーマーな湊にこうも言わせるとは、ゲネシスオンラインやはり尋常では無い。

などと今更な事を考えていた修一だった。

湊も族長を一人決め、名前を与えた。名前はミーシュ。その名前はどうなんだと修一は呆れた。

今日の所はここまでだと二人はゲームを切り上げる事とした。後の管理は暫くの間アルファとミーシュ、そしてアキが行う事にした。

何か進展があればアキから二人に連絡が入る。今はこの二つの一族が繁栄するまでする事がないのだった。

「あれ？　やっぱりこれクソゲーじゃね？」ゲーム終了間際の湊の言葉だった。

原始期（後書き）

何故か聖書をなぞるみたいに話が進んでいきますが、全くもって関係無いですし、私は無神論者です。

クリスマス？　ああ、世界中で不法侵入者が現れる日でしょ？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2434y/

世界創世ゲーム

2011年12月21日01時55分発行